## シーワールドのアニマル達

### ●ミナミアメリカオットセイ

ロッキーワールドの「アシカ・アザラシの海」に、小がらで、色が黒く、鼻先がとがった、アシカのようでアシカとは少しちがう動物が1頭います。この個体は、「ミナミアメリカオットセイ」という種類で、性別はメス、名前を「オッチ」といい、当館にやってきて14年めをむかえています。ミナミアメリカオットセイは、南アメリカの沿岸に生息していますが、日本の沿岸に北方より回遊してくる同じオットセイの仲間の「キタオットセイ」とは異なる種類です。この「オッチ」は、脱走の名人で、高さが2~3mのフェンスや壁などは、力の強い前脚でよじ登り、別のプールにいることがしばしばあり、係員を驚かせました。ロッキーワールドでは、この「脱走」が気がかりでしたが、そんなそぶりも見せず広い新居がたいへん気に入った様子で、長い前脚を使い、自由に泳ぎまわる姿を見せてくれています。「オッチ」は小さいからだのわりには気が強く、大きなカリフォルニアアシカのオスやキタゾウアザラシにも負けてはいません。じゃまをされた時などは、独特のかん高い鳴き声をあげながら、とがった鼻先をつきだしてむかっていきます。離れ岩に陣どって、他をよせつけず、ゆう然と寝ている姿も見られます。動物ののびのびした自然な姿を見ることができる「アシカ・アザラシの海」で、一度「オッチ」をじっくりと見てみてください。

（関）

### ●タテゴトアザラシ

タテゴトアザラシは、北極海周辺にすみ、成長すると体長1.7m、体重130kgになります。英名を「ハープシール」といい、大人になると背中に楽器の「ハープ」に似た模様があらわれ、特にオスでははっきりとしてきます。出産は2月から3月にかけて氷の上で行われ、子供は、白い毛につつまれています。当館では、1988年に日本で初めて飼育を行い、現在では、オスの「クウ」とメスの「ビル」の2頭を飼育しています。これまでは他の数種類のアザラシたちと共同生活をしていましたが、ロッキーワールドのオープンにともない、「ポーラーアドベンチャー」にある、北極海周辺の「氷の世界」を再現したプールで、ワモンアザラシ2頭となかよくくらしています。日本ではわずか3頭しか飼育されていない珍しいアザラシですが、旧展示プールではあまりお客様の注目を集めることはありませんでした。しかし、ガラスごしに動物をま近で見ることができる新しいプールの前では、お客様の行列ができるまでになりました。「ビル」がいつもガラスにぴったりと顔をつけて、プカプカと気持ちよさそうに浮いているからです。まるで「一緒に写真をとってよ！」といわんばかりの姿に、私達もおもわず笑いがこぼれます。他種のアザラシとちがい、物おじしない性格で、人なつっこい「クウ」と「ビル」。新居にもなれたところで、今度はぜひ、フワフワのまっ白い毛につつまれた赤ちゃんが見たいものです。（勝間）

▲ミナミアメリカオットセイ *Arctocephalus australis* のオッチ

▲タテゴトアザラシ *Phoca groenlandica* のビル（右）とクウ（左）



さかまた No.52 （禁無断転載）

編集・発行 鴨川シーワールド

〒296-0041 千葉県鴨川市東町 1464 − 18

☎(0470) 92−2121

発行日 平成10年12月

# さかまた

鴨川シーワールド NO. 52

# ロッキーワールドオープン

▲まるでカリフォルニアの光景、キタゾウアザラシ・パオの砂かけ

昨年の3月より工事を進めていた、「アザラシの島・ロッキーワールド」が7月25日にオープンしました。「ロッキーワールド」は地上階と地下階の2層からなり、地上階には、東京ドームと同じ純白のテフロン布でできたシェルターをもつ、アシカパフォーマンスの観覧席である「ロッキースタジアム」と、それを取り囲む、アシカ・アザラシ、トド、セイウチ、イルカ、フンボルトペンギンの「5つの海」があります。それぞれの「海」は、実際に展示されている動物やその仲間たちが生息する自然環境を重視した造形がなされ、彼らのいきいきとした姿を観察することができます。また、地下階には極圏に生息するラッコ、ペンギン、アザラシたちがのびのびとくらしている「ポーラーアドベンチャー」と、地上で見たアシカやアザラシ、セイウチ、イルカなどの水中の行動を、ガラスごしにま近で見ることができる「アクアティックアドベンチャー」があります。岩の上からダイビングするのはトドのファミリー。砂場に寝そべって、前脚で器用に砂をかけるのはキタゾウアザラシ。水中を飛ぶように泳ぐペンギンたち。

▲動物をま近で見られる「ポーラーアドベンチャー」

昨年生まれたセイウチの「キック」は好奇心がおうせいで、人かげを見ると「遊んで！」とばかり、水中のガラス窓に顔をつけます。このロッキーワールドで動物たちを見ていると、さまざまな発見があり、時がたつのも忘れてしまいます。

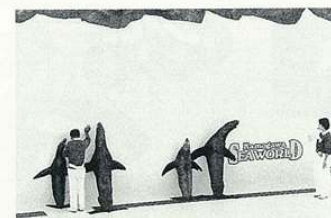
## 引越し

動物たちにできる限りストレスをあたえず、安全かつ迅速に新しい施設への引越しができるように、それぞれの個体に応じた綿密な計画がたてられました。工事も最終段階に入ると、いよいよ動物たちの引越し準備です。旧施設でのショーや展示を中止せずに引越しを行うことにしたため、大きく先発組と居残り組に分けることからはじまりました。セイウチやトド、キタゾウアザラシなどの大型の動物には、新たに移動のためのケージが用意され、事故防止と動物への負担を軽くするために、自らケージに入るトレーニングが行われました。カリフォルニアアシカは、歩いて移動することとなり、なれない園内各所を歩きまわるトレーニングが続けられました。7月に入ると、一部工事が続けられる中、動物たちの引越しのはじまりです。まず初めに、ロッキースタジアムでパフォーマンスを行うカリフォルニアアシカ5頭の引越しです。7月1日、多くの人たちに見守られ、旧アシカプールを出た一行は、オーシャンスタジアムを左に見て、無事ロッキースタジアムへとたどりつきました。わずか数百メートルの距離でしたが、アシカたちは、初めて見る世界におくすることなく、トレーナーについてきてくれました。ラッコや極地にすむペンギンは、気温の低い早朝や深夜に移動するなど細心の注意がはらわれました。心配していたセイウチの「ムック」「キック」親子は同じケージに入り、安全に移動することができました。そして、オープン前夜の7月24日、居残り組の動物たちの待ちに待った？引越しが行われ、フィナーレは体重1トンあるトドの「ノサ」がクレーンで吊り上げられ、全てが終了しました。このようにして、約1ヶ月間にわたった総数21種121個体の引越しは、スケジュール通りにいかずにドタバタしたところも多くありましたが、事故もなく無事完了しました。

▲セイウチファミリー新居にせいぞろい

▲カリフォルニアアシカは歩いてお引越し

## 新アシカパフォーマンス

ロッキースタジアムでは、アシカたちによるコミカルなパフォーマンスが行われています。旧施設とは全くちがう雰囲気の施設ということもあって、今までにない新しい「アシカショー」を創りだそうと、1年前より検討が続けられました。その結果、小道具を使わずに動物のもつ自然な行動をひきだし、トレーナーの動きと一体となった演出をすることとなりました。旧施設ではロッキーワールドオープン前日までパフォーマンスが行われるので、ロッキースタジアムのパフォーマンスのための新チームが編成され、トレーニングが行われました。新パフォーマンスのタイトルは「ロッキーワールドのパイオニアたち」と決まり、今までとはひと味ちがうコミカルなパフォーマンスをご覧いただくこととなりました。

▲新アシカパフォーマンスの１コマ

## オープンセレモニー

いよいよ7月25日の朝がおとずれました。たくさんのお客様が見守る中、鴨川吹奏楽団のファンファーレがおごそかに演奏され、本多鴨川市長をはじめ、動物友の会代表ら、来ひんの方々によるテープカットが行われました。続いてのアシカの「こけら落しパフォーマンス」では、新チームもトレーニングの成果を発揮してくれ、見事にパイオニアを演じてくれました。

▲オープンセレモニー

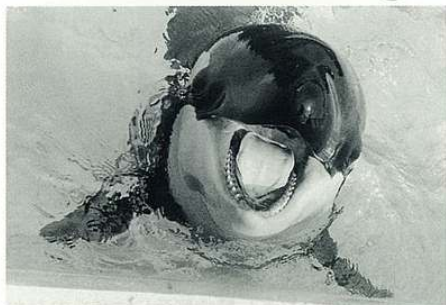
これまでのひれあし類の展示には見られなかった数々の新しい技法を取り入れたロッキーワールドは、まだスタートしたばかりですが、新施設に引越しして数ヶ月たった今では、動物たちもすっかり落ち着き、これまで見ることがなかった様々な行動を見せてくれています。ロッキーワールドを訪れたお客様が、彼らとの出会いを通して、海の動物たちのすばらしさを知っていただくために、「くつろげて、楽しく、学べる」エデュテイメントワールドめざして、毎日係員と動物たちはがんばっています。

金野

トピックス

# "ラビー"まもなく満1才!!

▲母親ステラとジャンプ!!(4ケ月)

▲母親ステラとツーショット(8ケ月)

▲まだまだミルクが大好き!!(9ケ月)

▲歯がはえそろいました。(6ケ月)

▲初めてトレーナーの手からエサをもらいました。(6ケ月)

▲ネェ〜! お姉さん遊ぼう!!(9ケ月)

1月11日に生まれて、あっという間に11ヶ月がたちました。生まれた時は2mほどだった体長も、今では2.8mになりました。初めての夏も無事にのりこえ、エサの魚も食べはじめ、広いプールを元気いっぱい泳ぎまわっています。
ときどきジャンプのまねごとなどをして、みんなを楽しませてくれる今日このごろです。

佐々木貴



# エコ・アクアロームの新展示

## 「沖合の瀬」

▲旧ラッコプールを改修した「沖合の瀬」水槽

7月28日、房総の自然を再現したエコ・アクアロームに新しい展示が加わりました。房総半島は「黒潮」の影響を強く受け、サンゴ礁の北限としても知られ、多くの熱帯性生物が生息しています。「沖合の瀬」と名づけられた新水槽は、この房総沖から黒潮の流れをさかのぼったところに位置する、伊豆七島近海にある岩場の浅瀬をモデルにしています。

▲岩をのりこえる波

この水槽では、岩をのりこえてくる波と、速い潮の流れによって大きくゆれる海草の林、おだやかな岩かげのイシサンゴ類、起伏に富んだ砂底や岩礁など、自然が創りだす複雑な海底景観を再現しています。そして、サンゴのすき間を忙しそうに出入りするスズメダイ類、色あざやかなチョウチョウウオ類、潮の流れにあわせて右へ左へ群れ泳ぐ小魚たち。子どもたちの人気者のアオウミガメの赤ちゃんやサメの仲間のネムリブカなど、様々な生物の生活を見ることができます。

たくさんの新しい発見がある水槽ですが、飼育スタッフにとっても、新たな体験をする場所となりました。それぞれの生物によって、生活様式が大きく異なるために、エサのあたえ方にひと工夫が必要となったのです。約60種800点の多種多様な生物へのエサは、水上からあたえるだけでは、すべてにゆきわたりません。自分のなわばりを離れようとしないスズメダイ類や、水底のヒトデやカニ類、気まぐれなサメやウミガメたちのために、水中に入りエサをあたえることが必要となりました。これまでとは勝手がちがい、なれない給餌の最中にウミガメに耳をかじられたり、強い水の流れにバランスを失い、ナマコをふみつけそうになったりと、とても神経を使います。その反面、1日2回のこの水中給餌は、水槽の前のお客様との楽しいコミュニケーションタイムにもなり、生物をま近で観察できる楽しいひとときともなりました。

▲水中給餌(アオウミガメの赤ちゃん)

山田か

## ●総合デザイン計画進行中！

より快適で、心がウキウキする空間を演出することを目的として、「海への旅立ち」をテーマに、園内の各所がリニューアルしました。波止場をイメージした正面広場に着くと、エントランスのむこうには水平線が広がり、海の世界へと誘います。エントランスをぬけると、そこは船の甲板。海への旅のはじまりです。イルカパフォーマンスの後は、中央広場でひと休み。石だたみと白いパラソルが、地中海の港の広場をおもわせます。各種のサインは、ビジュアルなデザインとなり、係員のユニフォームも一新し、シーワールド全体が明るく、楽しく生まれかわりました。今後もますます楽しくなるシーワールドにご期待ください。

津谷

## ●イルカと遊ぼう"ラブリードルフィン"

ロッキーワールドの「イルカの海」で、イルカと遊ぶことができる「ラブリードルフィン」が、「ディスカバリーガイダンス」のプログラムに新しく加わりました。プールの床を上下に動かすことができる、奄美大島瀬戸内の一部を再現したプールでは、水深60cmほどに浅くなったところで、お客様は自由にイルカとのふれあい体験を楽しむことができます。プールに入ると、遊び好きで好奇心たっぷりのイルカが、甘えるように近づいてきます。頭やからだをやさしくなでると、イルカは気持ちよさそうに目を細めます。人の心にやすらぎをあたえてくれる不思議なイルカの魅力を、ぜひ体験してみてください。

久下

## ●入園者2,500万人達成!!

8月10日に2,500万人めのお客様をお迎えすることができました。この記念すべきお客様は、東京都江東区からお越しの小学校5年生の和田桂子さんでした。おばあさん、お母さん、お姉さん、弟さんなど家族と一緒に来園した和田さんには、感謝状、認定証のほか、当館の姉妹水族館である、アメリカのカリフォルニアにある「シーワールド」へのご招待券や特大のシャチのぬいぐるみなどが贈られました。またこの日は、入園者2,500万人達成の感謝の気持ちをこめたイベント、「スペシャルサマーナイト」が夜9時まで行われ、海から打ちあげられた華やかな花火やシャチ、イルカのナイトパフォーマンスなど、にぎやかなスペシャルデイとなりました。

佐伯

## ●ドルフィンウォッチングステーション

イルカショープール観客席の最上段通路に、2台の双眼鏡を配備した「ドルフィンウォッチングステーション」がオープンしました。当館で行っている観察記録より、目の前に広がる海で、小型のイルカの「スナメリ」がよく見かけられることから、お客様にもこの「スナメリウォッチング」を楽しんでもらおうと開設したものです。まずは、イルカを探そうなどと、りきまずにゆったりと海をながめてみてください。そして、海鳥が群れていたり、さざ波がたっているなどのちょっとした海面の変化に注意してください。レンズのむこうで、丸い頭をした背びれのない小さなイルカが、発見できるかもしれません。あなたもラッキーチャンスをつかんでみませんか？

今井正